

スペインの姉妹校との交流に向けた準備と実践 —私立学校独自の国際交流を目指して—

茂木 俊浩

1. はじめに

文部科学省(2012)の小学校学習指導要領の外国語活動編によれば、その目標は「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」とある。日本国内の多くの小学校で実際に行われている外国語活動を見てみると、文部科学省(2012)に「指導計画の作成に当たっては、次の事項に配慮するものとする。(1) 外国語活動においては、英語を取り扱うことを原則とすること。」とあることが大きな要因と考えられるが、森住他(2016)「は外国語活動≒英語と解釈され、『外国語活動』という広義の意味から、『英語活動』という狭い範囲の活動に収まってしまっている」と指摘している。

近年ヨーロッパを中心にCommon European Framework of Reference for languages: Learning, teaching, assessment(以下、「CEFR」と略称)が注目されている(吉島他2004)。そして小川(2013)は、CEFRの根幹をなすのは複言語主義(Plurilingualism)であると指摘する。また、高橋(2014)によれば、多言語主義と複言語主義の違いとは、多言語主義はバイリンガル並みの言語能力の習得を目的とするのに対して、複言語主義はバイリンガル並みの言語能力の習得を目的とせず、個々人が持つ複数の言語能力が複合的に結びついてコミュニケーション能力が形成されることを目指し、またそれらの複言語能力の多様性に積極的な価値を認めようとする世界観をいう。世界共通語が英語であるからと英語だけ習得できれば良いと考える向きが日本には強いが、ヨーロッパでは母国語以外の二つの外国語の習得が奨励され、実施されるようになり、母国語が英語のイギリスでさえ当然のこととして外国語の習得が義務づけられる現代において、日本は世界的な傾向に反して英語一辺倒に偏ってしまっている。森住他(2016)は、「従って現在の日本を見ると、物事に対する解釈や発想が英語を母国語とする文化圏から過大な影響を受けてしまっている。」と指摘する。このままでは日本の未来の文化力の幅は狭まり、世界の中の日本の立ち位置は厳しくなる一方だろう。未来を担う子どもたちには多種多様な文化や言語があることを体験させ、伝える必要がある。

本稿は私の勤務校である光塩女子学院初等科(以下「初等科」と略称)における実践を示し、その課題と今後の展望を報告することが目的である。私は本校に赴任後、光塩女子学院(以下「光塩」と略称)の独自性は「スペインとのつながり」にあると確信した(光塩女子学院1982)。小学校において英語圏ではない地域と交流する学校はまだ少ない上に、スペインと交流している私立学校は私が調べた限り、他にない。柔軟な思考を持つ6歳から12歳の時期にこそ、様々な言語や文化に触れることが必要であると私は考え、校長や英語科の教職員のバックアップのもと、手探りの交流を始めた。加えて、2020年には東京オリンピック・パラリンピックの開催が決定し、今後求められる日本人像として、世界中の多種多様な人々を尊重しあえる人材を育成していくことが望まれているのである(東京都2015)。

2014年より、英語科と連携しながら私立学校の特色を活かして、日本の初等科とスペインにある姉妹校のベラ・クルス校(Colegio Vera-Cruz)の間で子ども同士による国際交流を計画した。本稿では交流を通じた初等科生の感想や活動中の様子を示し、国際交流が初等科生に及ぼす影響を考察する。交流を始めるにあたり、目標はそれぞれの言語や文化を包含した交流を考えていたが、その前段階となる英語での交流が思わぬ新規性を孕んでいたことに気づかされたため、その良さについても報告する。また、新しい学校と国際交流をするための環境を整備する上での実践や課題についてもまとめた。国際交流を通して、子どもたちの中に世界中の個々を受容する思いやりの心や、お互いの国の文化の違いを認め理解する姿勢が見られれば、本交流は意味深いものであったといえるだろう。

現在、初等科の外国語活動は英語が主であり、スペイン語は課外の活動として扱われている。そのため、初等科においても今のところ様々な言語や文化について、正課の授業で触れるという真の意味での外国語活動が行われているわけではない。

2. 光塩女子学院初等科とベラ・クルス校の関係

初等科がなぜ姉妹校であるベラ・クルス校との交流を立案したか、その動機は以下の三つである。

- ①光塩には学校を設立した修道会を同じくする「姉妹校」が世界に複数校存在し、これまでその姉妹校の一つであるベラ・クルス校との関係が「シスター間で」続いていたこと。
- ②シスターの高齢化をうけて、光塩とベラ・クルス校との関係が近い将来途切れてし

もう懸念があったこと。

- ③ベラ・クルス校のあるスペインは英語が母国語ではないが、英語を使った交流をするとき、「言語上の対等な交流」が期待できたこと。

2.1 私立校である光塩ならではの姉妹校

光塩はスペインのベリス・メルセス宣教修道女会(以下「メルセス会」と略称)が設立母体の私立カトリック校の幼稚園から高等学校までの一貫教育校である(初等科から高等科までは女子校)。メルセス会は世界各地に学校を設立しており、スペインにはベラ・クルス校がある。ベラ・クルス校は世界に点在する姉妹校の中で、光塩を創設した福者マドレ・マルガリタがメルセス会をつくった修道院から最も近い場所に位置する学校である。初等科生はこの交流を通して光塩のルーツについてもより深く理解できる上に、世界を体感し視野を広げられるのであるから一石二鳥である。そのため、初等科の子どもたちにとって世界中の姉妹校の中でベラ・クルス校が最適な交流先であると確信した。

以前から初等科ではメルセス会の日本人シスターが授業時間外において、週に約一度のペースで3年生から5年生の希望する初等科生を対象に「スペイン語教室」を開講している。しかし、初等科は姉妹校と「初等科として」交流したことは今までになかった(茂木俊浩 2012)。

一方、スペインの北部バスク地方のビトリア(Vitoria-Gasteiz)にあるベラ・クルス校(Colegio Vera-Cruz)は、2歳から15歳までの一貫教育校(男女共学)で、教育目標の一つに、複言語教育が挙げられている。ベラ・クルス校が掲げる言語教育では3言語:カスティーリャ語(スペインの共通語)、バスク語(バスク地方特有の言語)、英語の獲得を目指している(Colegio Vera-Cruz 2015)。

2.2 英語が母国語ではない者同士の交流

スペイン国内における共通語はカスティーリャ語(以下、「スペイン語」と呼称)で、英語ではない。もしも国際交流をする相手校が英語圏にあったとすると、多くの日本人は相手と自分の英語の熟練度の大きな差のために、恐れて委縮してしまう可能性があるだろう。しかし、スペインは母国語が英語ではないため、お互い母国語が英語ではない者同士、言語的に対等に、恐れることなくコミュニケーションしようとするだろうと考えた(図1)。幸い、光塩は創立当初からの外国語教育を教育の特色とし(図2)、特に初等科では創立当初より英語の授業があり、現在も全学年が週に2校時、ネイティブスピーカー

と日本人教師の 2 名によるチームティーチングで英語の授業を展開している(図 3)。スムーズに新たな国際交流を初等科に導入するために、現状の英語科の授業に付け加える形で英語を使いながらスペインとの国際交流を試みることにした。

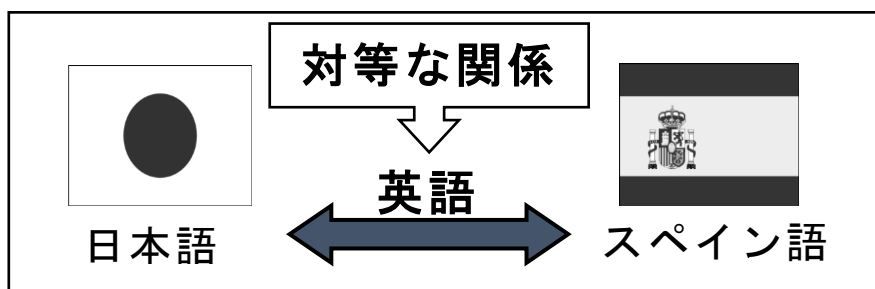


図 1 英語を仲立ちとした日本語とスペイン語の



図 2 光塩創立当初の授業の様子



図 3 現在の英語の授業の様子

3. 目標と計画

私は、「私立学校」、「学校創立のルーツがスペイン」、「複言語教育」という三つの視点から国際交流先の学校をベラ・クルス校とし、国際交流を始めるにあたっての目標を以下の通り定めた。

目標：世界の多様性を受容できる子ども

最終目標は日本とスペインの言語や文化を相互にやり取りする交流を考えていたため、突然ステップアップすると初等科生も教職員の気持ちも追いつかないことが予想された。まずは、互いに母国語ではない英語での交流をすることで、学校全体の機運を高めるように工夫した。一見まわり道をしているように思えるが、「互いに母国語ではない英語での交流」は子どもたちにとって大変意味深いものであることが後にわかった。目標実現のために従来の初等科の活動に加え、さらに発展させる形でとらえ直したものを表 1 としてまとめた。

表 1 ベラ・クルス校との交流を始めるにあたっての目標設定

目標	従来の初等科	今後の初等科
グローバルな人材の育成	英語の授業ではネイティブスピーカーの先生などを通して英語や英語圏の文化に触れる機会を大切にしている。	英語圏に加え、英語圏だけではなく、スペイン語圏を通した複言語・複文化を体験する。
初等科生の視野を広げる	世界のどこかで災害が起こった際にする募金活動や、6年生の総合的な学習の時間では「世界を知る」として授業を展開している。	従来に加え、姉妹校とのやり取りを通して、対人関係の中で、初等科生自身が世界を体感し、自他の違いを認識し、自己を見直すきっかけとする。

初等科生にはこの交流を通して、世界の多様性を受容できる子ども、視野を広く持ち個々を尊重できる子ども、世界から客観的に日本を認識し日本の良さに気づける子どもに育ててほしいと願っている。

次に目標達成までのロードマップを表 2 に示す。目標の達成のためには初等科生の気持ちをスペインに向けさせることはもちろんのこと、初等科の教職員についても同様に意識を高めていく必要がある。いくら私立学校とはいえ、私ひとりでも国際交流を続けても長続きはしない。いかに一人でも多くの教職員を巻きこみながら交流を展開していかけるかを意識しながら実践をしていくこととした。

表 2 目標達成にむけた国際交流ロードマップ

交流の段階	交流の形式
第 1 段階	職員間の交流
第 2 段階 (現在の交流の段階)	児童間のそれぞれの国の母国語ではない英語を使った交流 <ul style="list-style-type: none"> ● 多対多対応の交流を行う。 ● 一対一対応の交流を行う。
第 3 段階	児童間の互いの国の文化面を含めた交流 <ul style="list-style-type: none"> ● 日本語やスペイン語を使った交流 ● 目を見て話す(テレビ電話) ● 会って話す(学校訪問) ● 訪問して生活してみる(ホームステイ)

4. 実践

ここでは初等科とベラ・クルス校との交流の実態について紹介する。

4.1 時系列で振り返る準備と実践

初等科とベラ・クルス校の交流にむけた 2014 年-2015 年の準備と、2015 年-2016 年の交流実践を時系列で表 3 として次ページにまとめ、以下に項目別にまとめる。

4.2 国際交流ロードマップの概況

ここでは、私が策定した本校の国際交流ロードマップについて、三つの段階という観点から概況を説明する。

4.2.1 第 1 段階 職員間の交流

学校として交流を始めるために、学校長間でのやり取りがまずは求められた。2015 年 7 月から両校の校長間でメールやデータのやり取りから職員間の交流は始まった。この時、メルセス会の総長より世界の姉妹校の交流について推進すること、その試金石として初等科とベラ・クルス校の交流を支援する旨、全世界のメルセス会に通達があり、交流の始まりがスムーズに進むこととなった。写真や映像の共有はベラ・クルス校からの提案で Dropbox を利用している。まず、両校の様子を知りあうために、学校の説明や行事

の説明についてデータの交換を行った。

表 3 時系列で振り返る準備と実践

年	月	内容
2014	4	教職員を対象としたスペイン語講習会を1年間開講。
	7	個人的に単身、スペインを訪問。修道院に宿泊しながら、ベラ・クルス校を訪問し校長と対面、バルセロナなど主要都市を周遊した。
	8	第1回 スペイン大使館訪問。6年生希望者30名と引率者7名が参加。
2015	4	初等科6年生有志を対象とした「スペインについて学ぶ会」を開講。
	7	初等科とベラ・クルス校の校長間メールのやり取りを開始。
	9	校長間のデータ共有開始。※1 第2回 スペイン大使館訪問。6年生希望者30名と引率者6名が参加。スペイン料理店訪問プログラムを追加。
	10	①4: 英語の授業の様子を撮影し、映像を共有。※2
	12	① スペイン大使館訪問について6年生による報告の映像を共有。
		①4: 音楽の授業でスペイン語の歌を録画し、映像を共有。 ①: 「メルセスの聖母の祝日」に関連した学校行事「感謝の集い」の映像を共有。 ②: 「メルセスの聖母の祝日」に関連したミサの様子画像を共有。
	初等科4年生とベラ・クルス校3・4年生の英語による交流を開始。 ③3・4⇔①4: クリスマスカード送付と受取。(多対多対応)	
2016	2	初等科4年生を対象とした第1回アンケート調査を実施。 ③3・4⇔①4: バレンタインデーカード送付。ベラ・クルス校からは一対一対応の作品を受取。
	3	③3・4: 「春が来た」「今日の日はさようなら」の映像(日本語)を共有。
	4	初等科内に教職員14名が参画するプロジェクト「スペイン」の立ち上げ。 初等科6年生有志「スペインについて学ぶ会」を継続して開講。
	5	①5→②3・4: 自己紹介カードの発送(初めて初等科から一対一対応での送付)。
	9	初等科5年生を対象とした第2回アンケート調査を実施。

※1: 「共有」は Dropbox¹にアップロードしたことを意味する。

※2: ①は初等科がベラ・クルス校に宛てた交流の実践である。②はベラ・クルス校が初等科に宛てた交流の実践である。例:「①4→②3・4」は初等科4年生がベラ・クルス校3・4年生に宛てた実践である。

¹ Dropbox とはインターネット上で提供されているクラウドサービスのこと。
<https://www.dropbox.com/> [accessed 30 Nov 2016]

4.2.2 第2段階 児童間のそれぞれの国の母国語ではない英語を使った交流

2015年12月からは初等科の4年生80名とベラ・クルス校の3・4年生計106名による、子ども同士の交流が始まった。年間交流計画は年4回を基本とし、2年目以降も定常的な交流を目指している(表4)。

表4 年間交流行事

月	行事
9	メルセスの聖母の祝日
12	クリスマス
2	バレンタインデー
6	夏のお便り

交流形態は、多対多の交流と一対一の交流の二つである。前者は学年あるいはクラス単位の双方向交流である。具体的な取り組みとして、学年から学年へ複数個の作品を作り、送付した(図4～図7)。初等科では英語の授業を利用し、英文を作成し、さらに飾りつけをしてから送付した。今後は図工や総合等の授業も活用し、制作したい。後者は初等科生とベラ・クルス校の児童という個人単位による双方向交流である。自分が交流する児童を一人または二人で固定をして作品や手紙などを送付するというスタイルである。現在、初等科とベラ・クルス校の交流はこの第2段階まで実践した。



図4 作品を作るベラ・クルス校の児童



図5 ベラ・クルス校の児童が作ったバレンタインデーの作品



図 6 初等科生がクリスマスに作った作品



図 7 初等科から送られた作品を持つ
ベラ・クルス校の児童

4.2.3 第 3 段階 児童間の互いの国の文化面を含めた交流

交流を 1 年間終え、子どもたちの想いは、英語だけではなくスペイン語や日本語を利用し、お互いの国の文化をより深く知りたい、または知らせたいという段階に進みつつある。

顔を映しながらのテレビ電話、ひいては児童本人がそれぞれの国を行き来して、学校訪問や授業に参加する等の交流に向けて現在準備を進めている。

4.3 学校紹介の画像や映像の共有の実践報告

4.3.1 第 1 段階 子どもを介さない職員間交流の実践

学校間交流の実践の実績について詳述する。まず、お互いの学校がどのような学校なのかを知りあい、交流する相手について興味関心を喚起することがこの段階の目的である。初等科の学校行事の中からスペイン語や英語が使われている行事を三つ選出し、初等科の様子をベラ・クルス校に伝える資料を作成した。具体的には以下の通りである。

- ① 姉妹校間で共通の記念日である「メルセスの聖母の祝日」に関連した初等科の学校行事「感謝の集い」の中から歌「あめのきさき」の日本語版と英語版のメドレーを撮影し、送付した。
- ② 音楽の授業では、スペイン語の歌「Santa María del camino」を歌う授業風景(4年生)を撮影した。この曲は全校児童が歌えるスペイン語の曲であり、もとはカトリック教会

のミサの中で歌われる聖歌である。

- ③4年生の英語の授業風景を撮影した。初等科で行われている英語の授業の様子を伝えることで、どの程度のレベルの授業を受けている日本人が交流をするかがベラ・クルス校に伝わるだろうと考えた。

2016年4月、初等科内に校務分掌としてスペインについて検討するプロジェクト「スペイン」を立ち上げる許可が下りた。各学年から担任が最低1名は参加し、月に一度のミーティングでスペインとの交流について情報交換を行っている。

4.3.2 第2段階 初等科4年生によるベラ・クルス校との交流

「互いに母国語ではない英語での交流」は子どもたちにとって大変意味深いものであることがわかった。特筆すべきは図1で示した通り、日本の小学校とスペインの小学校が母国語ではない「英語」を仲立ちとすることで「対等」な関係となれることである。

初等科英語科として全学年の中から4年生で交流を始めた動機は、主として以下の三つが挙げられる。

- ①文章(アルファベット)が正しく書ける。
- ②元気よく歌を歌い、大きな声で発言をし、自ら進んで学ぼうとする姿勢に満ちている。
- ③カリキュラムに少なからずの余裕がある。

このような動機を踏まえて、4年生担任の教職員と協力しながら交流を行った。

4年生は今まで4年間勉強してきた英語が活かされる機会に恵まれた喜びと、まだ見ぬ世界の友達との交流を夢見てワクワクしている様子を見ることができた。ここでは交流活動中に特に私が気づいた様子を以下に六つ挙げておきたい。

- ①自分が交流する相手が男の子か、女の子か、友達と報告しあい、相手が男の子だとわかると、作る紙工作の色遣いを変える等の工夫が見られた。
- ②多くの初等科生はプレゼントの送り主の名前が読めず、教職員に聞きに来た。
- ③スペインのクラスでどのような名前が多いのか興味を持っていた。今年のクラスは「Fernandez」が多く、日本で例えれば「鈴木」や「佐藤」みたいだと話していた。
- ④同じスモックを着ていて姉妹校だとわかった。

- ⑤自分が作った作品を姉妹校の子どもたちが持っている写真を見て、「あの作品は○○さんが作ったものだ。」「私の作品が届いている。」などの声が聞こえた(図 6、図 7)。
- ⑥今度は私たちのことももっと知ってもらいたいという次の交流への強い意欲が垣間見えた。

なお、初等科生に対して実施したアンケート調査の結果については後述する。

4.4 初等科 6 年生によるスペイン大使館訪問

2014 年夏、東京の六本木にあるスペイン大使館への訪問を企画した。スペイン大使館は日本の東京都内にいながら本場の香り漂うスペインを直に体験できる貴重な場所である。またこの訪問は、大使館のスペイン人職員がスペインと日本の関係、大使館の役割やスペインの紹介などをわかりやすく日本語で話してくれる大切な社会見学の場でもある。普段は入れない大使館のバックヤードにも入る機会を得、初等科生はスペイン文化という異文化の雰囲気堪能した。

大使館訪問は初等科生にとっては学習意欲と異文化理解力の向上につながる効果を感じられた。教職員にとっても国際交流にやりがいと醍醐味を感じることでできる経験となった。初等科生にとって初等科の学校生活で触れていたスペインを今までと違う形でより身近に感じることができた。また教職員にとっては異文化体験の引率の経験を積むことができ、今後の交流活動に向けて意識の向上につながるという確信を得た。

2015 年の第 2 回大使館訪問より、スペイン大使館に程近いスペイン料理店にてスペイン料理を体験するプログラムを追加した。初等科生はスペイン大使館でスペインについて学習した後にスペイン料理を食べながら、言語だけでなく、文化的な体験も経験することができた(図 8)²。



図 8 スペイン料理店に入る初等科生

4.5 私の自己研鑽について

² 2015 年のスペイン大使館訪問について英語でまとめたプレゼンテーションの映像を 6 年生有志で作成し、ベラ・クルス校に送付した。

私は本交流を進める決断をした 2013 年にスペイン語の学習を独学で開始した。その動機は将来、スペインの学校と交流が実現した時に自分が通訳をしたい、ということである。1 年後の 2014 年に自費でスペインを単身で訪れ、交流のための実地踏査を行った³。その 2 年後、2016 年 3 月に第 50 回全日本スペイン語スピーチコンクールに出場し「ペルー大使賞」を受賞した。また、2016 年 8 月にはスペイン語検定 3 級に合格し、現在は特定非営利活動法人 TOKYO FREE GUIDE にてスペイン語ガイドとして、東京を訪問する外国人を案内するボランティア活動をしながら、スペイン語やスペイン文化に触れる活動に励んでいる。

5. 初等科 4 年生とベラ・クルス校 3・4 年生の交流実践を通して見えた効果と課題

初等科とベラ・クルス校との国際交流の効果と課題を把握するために、交流に参加した初等科生を対象にアンケート調査を行った。その結果などに基づき、現時点における主な効果と課題を整理することにする。調査方法は以下の通りである。

第 1 回アンケート(本稿末尾、資料 1)

日 時:2016 年 2 月 18 日(第 1 回調査)

方 法:記名式による三択ないし四択で質問文に回答する簡易なアンケート形式の調査。一部は記述式。ホームルームの時間を使い 10 分程度で行い、書ききれなかった児童については後日回収とした。

被験者:初等科 4 年生児童 80 名(うち、75 名分を回収)。回収率は 93.8%。

第 2 回アンケート(本稿末尾、資料 2)

日 時:2016 年 10 月 12 日(第 2 回調査)

方 法:記名式による三択ないし四択で質問文に回答する簡易なアンケート形式の調査。一部は記述式。総合的な学習の時間を使い 10 分程度で行った。

被験者:初等科 5 年生児童 81 名(うち、80 名分を回収)。回収率は 98.8%。

³ この時、修道院に泊まることができたのは光塩の理事長であるシスターの要請によって実現したことである。太田牧子理事長に対して、記して御礼と感謝を申し上げたい。

5.1 主な効果－アンケート調査の結果から－

第1回調査の結果、図9に示されているように、「スペインの子どもと英語で交流してみたいですか?」という初等科生の英語を使った交流意欲をたずねた質問に対して、「ぜひしてみたい」と回答した初等科生が85%(64/75)、「してみてもよい」と回答した初等科生が13%(10/75)であった。両者を合わせると被験者の初等科生99%(74/75)が英語による国際交流に対して意欲を持っていることが確認できた。

また1年間ベラ・クルス校の児童との交流を経験した5年生に対して、「スペインの子どもと英語で交流してみた感想」をたずねた結果(図10)、85%(68/80)が「してよかった」と回答した。全体として交流に対する一定の満足度が窺われた。「特に何も感じなかった」と回答した生徒が15%(12/80)いるものの、「しない方が良かった」と交流自体を否定する回答者は皆無であった。

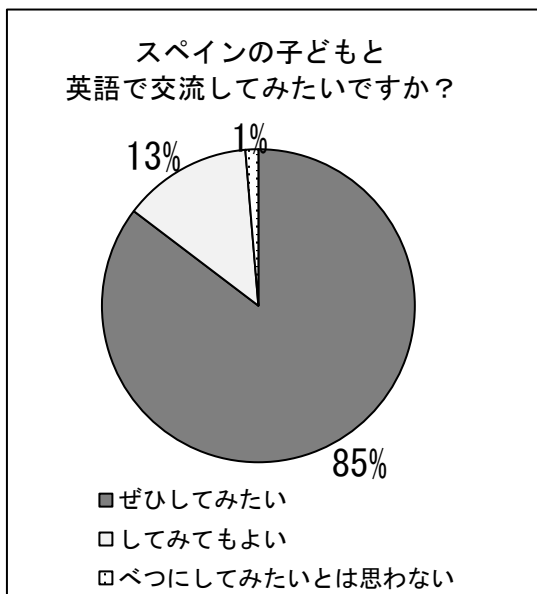


図9 スペインの子どもと英語で交流してみたいですか(交流中)

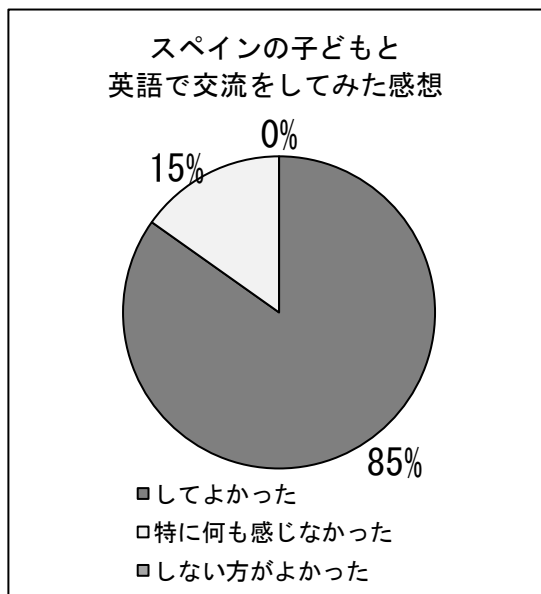


図10 スペインの子どもと英語で交流してみた感想(交流後)

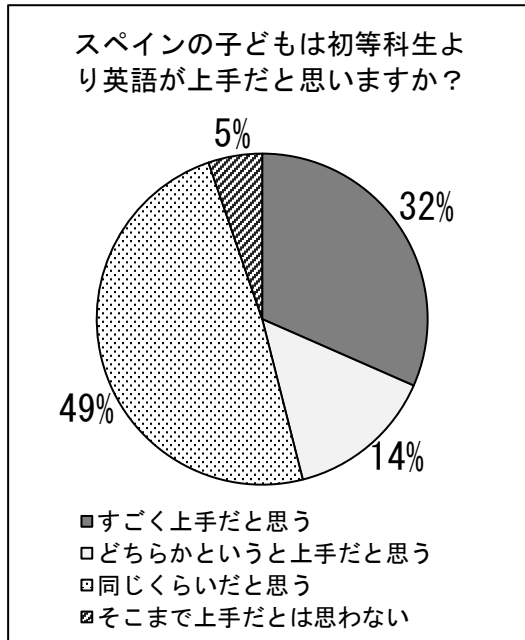


図 11 スペインの子どもは初等科生より英語が上手だと思いますか(交流中)

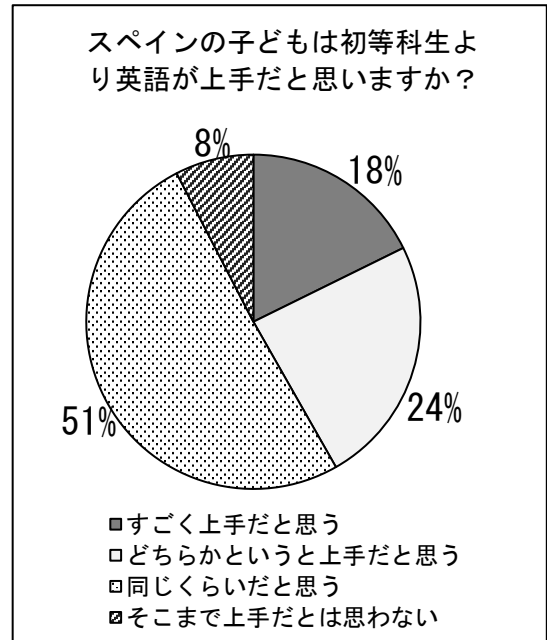


図 12 スペインの子どもは初等科生より英語が上手だと思いますか(交流後)

次に「スペインの子どもは初等科生より英語が上手だと思いますか？」という質問に対する回答結果について言及すると、交流中の初等科4年生を被験者とした第1回調査では、32%(24/75)が「すごく上手だと思う」、14%(11/75)が「どちらかというとう上手だと思う」と回答し、全体として半数弱に相当する46%(35/75)がスペインの子どもは初等科生よりも英語が上手だと感じていることが判明した。一方、特筆すべき点は、同時に49%(37/75)の生徒が「同じくらいだと思う」と回答したことである。第2回調査でもほぼ同様の結果が得られた。1年間の交流を経験した初等科5年生を被験者とした第2回調査では、18%(14/80)が「すごく上手だと思う」、24%(19/80)が「どちらかというとう上手だと思う」と回答し、スペインの子どもの方が上手だと感じているのは、42%(33/80)で約4割である。それに対して、「同じくらいだと思う」と回答した生徒は半数以上の51%(41/80)となっている。さらに興味深いのは、「そこまで上手だとは思わない」との回答率が2割弱の18%(14/80)もあったことである。調査対象の被験者が4年生と5年生で

成長したこと、また被験者の定点観測的な調査も不十分であることなどから、即断はできないが、初等教育段階における英語を母国語としない交流では、おそらく言語運用上の能力差が顕著になりにくいという傾向があり、結果的にスペインの児童と対等な関係で英語を使うことができたというある種の自信と実感を初等科生が得たことがこの調査結果から窺われる。

5.1.2 児童多対多対応のメリット

多対多の交流を進める教職員の視点から考えると、主に以下の三つのメリットが挙げられる。

- ①宛先の児童名を確認する必要がなく、指導する注意点が少なくて済む。
- ②作品作りが得意な児童と、得意でない児童の作品を混ぜて送付できる。
- ③作品作り当日に欠席をする児童がいても大きな問題にはならない。

初等科生の望みは多対多対応ではなく、一対一対応に向かっていることは明らかであることが児童の声からも明らかとなった。

5.1.3 児童一対一対応のメリット

アンケート調査の結果から得られた交流のメリットに言及したい。

第1回調査での「スペインの子どもと英語で交流するとあなたにとって良いことがありますか？」という質問に対して、68%(67/75)が「ある」と回答し、その理由を確認したところ、その内の44%(33/75)の被験者が「友達になれそう」、24%(18/75)が「英語が上達しそう」と答えた。したがって、初等科生は姉妹校のスペインの児童との国際交流に参加する動機となるメリットを認識していることがわかった。

この結果を受けて、多対多の交流に加えて、個人単位による交流(一対一の交流)を導入した。具体的には、交流の相手を固定した一対一対応の自己紹介カード作りに取り組んだが、初等科生の交流のモチベーションがさらに大きく上がった。

第2回調査における「スペインの子どもと英語で交流するとあなたにとって良いことがありましたか？」という質問に対して、8割を超える84%(67/80)が「あった」と回答した結果は、実際に交流のメリットがあったと児童自身が実感していることを示している。この内、56%(45/80)がその理由について「視野が広がった」または「世界に目を向けられた」

と説明している。さらに 28%(22/80)は「言語的に成長できた」と答えている。つまり、英語のコミュニケーション能力が伸びたことを実感している。交流のメリットがあったということは裏付けられたと思われるが、「英語が上達しそう」という期待には応えられなかったようである。今後一対一の交流の理想のあり方を探求し、洗練し、交流体験を積み重ねる中で、初等科生の「言語的な成長」につながるようにしていく必要があると思われる。とはいえ、今まで私立女子小学校という非常に狭い場所で生きていた初等科生は、突然スペインという地球の反対側にいる新しい友達と触れあう機会を得て、「自分の視野が広がった」と回答した初等科生が多かったことは大きな教育的成果である。

このように、姉妹校と英語を使った交流の先にある、最終目標である「世界の多様性を受容できる子ども」への成長に向けて子ども自身が歩みを進めている。スペインについて興味関心を持ち始めると同時に、自分が属する日本についても興味関心を持ち始めていることも顕著に観察された。この点についても大切な教育的な成果の一つと言えるかもしれない。

5.2 主な課題と対策

2014年8月から事実上のスペインとの交流をスタートさせて2年以上が経過し、数多くの困難や障害に直面した。それらのうちから課題を四つ、すなわち、時差の問題、郵送上の問題、一対一の交流の問題、文化の違いの問題を指摘したい。その上で、考え得る対策を述べたい。

5.2.1 時差の問題と対策ーリアルタイム通信の難しさ

今後の交流を進めるにあたって、スペインと日本は標準時差が8時間、サマータイムでも7時間あるため、東京が午後4時のときに、スペインでは午前8時か午前9時であり、テレビ電話のチャットを学年の活動として授業中に行うのは非現実的となってしまう。

とはいえ、手をこまねいては何も進まないのも、リアルタイムのテレビ電話を実現させるための対策として、学年単位ではなく、有志を募集して日本の夕方とスペインの早朝で実験的な実現を目指したい。

5.2.2 郵送上の問題と対策－郵便物の到着遅延

国外への郵便物は空港にて税関でチェックを受けるために遅延の可能性が大きい。1年間で4回ほど初等科生の作品を送付した際に困ったことは、特にスペインに入国した際の税関で最大1か月の遅延が発生したことである。送付には郵便物の追跡が可能なEMS(Express Mail System)を利用したため、遅延が30日間だったことが確認できた。

郵便物の遅延については、①時期や季節による違い、②利用する業者の違い、③通過する税関による違い、④送付する荷物のサイズや重さによる違いなど、数多くの要因が考えられる。

今後はこれらのリスク要因を排除できるように、いくつかの条件を揃えて、それらの条件をうまく制御しながら、より安全でより安価でより速く郵送される手立てを模索していきたい。

5.2.3 一対一の交流の問題と対策

一対一対応でベラ・クルス校から受け取ったプレゼントは、4名分の作品が足りず、対応に苦慮した。多対多対応であれば発生しない問題が一対一対応にはあることがわかった。また、今後も欠席児童の他に転編入生や転退学生が出てきた時の対応を考えると、対応が難しいことが予想される。一対一の交流には、当然ながら、手間暇がかかり、きめ細やかな対応が必要となる。児童一人一人に焦点を当てた「オーダーメイド」的な対応が時に求められるため、人手が足りないというマンパワー的な問題を常に孕んでいる。

一対一対応にはデメリットがあるが、それを超えるメリットがあると考えられる。小学生にとって友達作りは、顔と名前を一致させること、一緒に遊ぶこと、お互いを知りあうことにつながる。その先にお互いの国を訪問しあうこと、ホームステイやお互いの学校の授業に参加することなど、交流によって紡ぎ出される夢はさらに大きく膨らむ。現時点でデメリットへの対策は見つかっていないが、今後も教育効果の大きい一対一対応の交流を続けられるようにしていきたい。

5.2.4 文化の違いの問題と対策－文化の差から生じる教職員の対応の違い

同じ設立母体を持つ学校同士とはいえ、教職員は日本人とスペイン人の違いがある。

教職員も英語を仲立ちとして連絡をしている現在、お互いの考えをすりあわせることが難しい。伝えたいことの全てを E メールで書こうとすると長文となり、相手に負担を強いてしまう恐れがある。常に相手校にとって負担となりすぎないような配慮をしながら連絡を取る必要があり、そのやりとりの加減が難しい。

メールのやり取りによる意思の疎通は日本人同士でも難しい。それが日本とスペインという文化的な違いも大きいであろう二国間でお互いの母国語ではない英語で教職員もメールでやり取りをしているので、無理が生じるのはある意味当然である。しかし、初等科生やベラ・クルス校の子どもたちにとって、この交流が世界に目を向けさせるチャンスであることは疑いようのない事実であると感じて、今後も先方を気遣いながら交流が途切れないように交渉していくしかないと思われる。いずれにしても現状では、寛容と忍耐の心で、ともに仕事をする経験を蓄積しながら、最善のやり方をその時々で柔軟に見出していくほかはなさそうである。

また、スペインに限らず日本においても、教職員にとって基本業務以外の「国際交流」を進めていくことは負担が大きいのは明らかである。交流を進める旗振り役として私は尽力しているが、交流が継続していけるように、いかに教職員の負担を減らしながら細く長く続けられる交流が作れるか、を模索していくことが求められていると確信する。

6. 今後の展望－結びにかえて

初等科 6 年生がスペインについて学ぶ会を終える際に次の感想を書いた。

「2020 年に(東京)オリンピックがあり、沢山の外国人が日本におとずれると思うので、その時にスペイン語を少しでも話せたら外国人とつながりが持てると思う。」

私立小学校としての光塩の独自性が今後、より一層求められると私自身強く感じている。小学校段階における国際交流は、言語を系統的に学ぶことでも単語を多く暗記することでもない。「友達を作りたい。」「友達とお話をしたい。」という純粋な思いを実現するために、自分が今まで使っていた日本語とは違う言語に興味を持ったり、日本とは違う文化に興味を持ったりすること、そしてそこから改めて自分の言語や文化を見直し、興味を深めること、まさにこれこそが小学校段階における国際交流の意義ではないだろうか。

姉妹校との国際的な交流によって、初等科の子どもたちがいつの日か世界中の多種多様な人々を尊重しあえる人になり、自国である日本を見直すきっかけとなれば本望で

ある。今後もベラ・クルス校との交流を通して、様々な実践を着実に展開し、より良い交流の形を模索したい。

最後に、この活動を進めるにあたって、光塩女子学院初等科校長の小坪洋先生をはじめ、児童や教職員の皆様から多大な協力を賜りました。改めて深く御礼を申し上げます。

(光塩女子学院初等科)

参考文献

- 文部科学省(2012)『小学校学習指導要領 外国語活動編』, 文部科学省.
森住衛他編著(2016)『外国語教育は英語だけでいいのか』, くろしお出版.
吉島茂他訳編(2004)『外国語教育Ⅱ－外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠－』, ゲーテ・インスティトゥート.
小川敦(2013)「ヨーロッパ言語共通参照枠、特に複言語主義の考えとドイツ語教育」『一橋大学大学教育研究開発センター 人文・自然研究 7』, 148-161 頁.
高橋百代(2014)「外国語教育の意義と新たな方向性－北星学園大学の外国語教育の歴史を中心に初修外国語の意義と方向性を求めて－」『北星学園大学文学部北星論集 51(2)』, 33-51 頁.
光塩女子学院(1982)『光塩女子学院 50 周年誌』, 光塩女子学院.
東京都(2015)『2020 年に向けた東京都の取組－大会後のレガシーを見据えて－』, 東京都.
茂木俊浩(2012)『光塩女子学院初等科の歴史』, 光塩女子学院初等科.
Colegio Vera-Cruz(2015) *¡¡Conócenos!!* , Colegio Vera-Cruz.

Preparations and Practices of International Exchange
with Sister School in Spain:
Aiming for Original International Exchange in Private Schools

Toshihiro MOGI

Koen Elementary School has several sister schools all over the world. Recently we began an international exchange with “Colegio Vera-Cruz” at Vitoria-Gasteiz in Spain. The novelty of this report is that this international exchange is conducted in English which is not the first language of either country.

The exchange with “Colegio Vera-Cruz” makes it easier for our students to communicate in English as the Spanish students are studying English as well. This report shows how students become active in establishing friendly relationships with children of our Spanish partner school. This partnership is unique to Koen Elementary School and is likely to become the first real test of the international exchange between Japan and Spain in private elementary schools.

資料 1

アンケート①		2016.2.18
4年__組__番 _____		
ベラ・クルス校との交流についてのアンケート		
2015年冬から実験的にスペインのベラ・クルス校と交流が始まりました。今後のよりよい活動のためにアンケートにご協力をお願いします。このアンケートは成績には全く関係がありません。集計結果は先生方が学校の外で発表する機会がある時に使用することがありますが、個人名は公表しません。		
1. 英語は好きですか？	すごく好き どちらかという好き どちらともいえない あまり好きではない	
2. スペインの子どもと英語で交流をしてみたいですか？	ぜひしてみたい してみてもよい べつにしてみたいとは思わない	
3. スペインの子どもは初等科生より英語が上手だと思いますか？	すごく上手だと思う どちらかという上手だと思う 同じくらいだと思う そこまで上手とは思わない	
	➤ なぜそう思いますか？ ()	
4. スペインの子どもと英語で交流するとあなたにとって良いことがありますか？	すごくある どちらかというとある あまりない	
	➤ 「ある」と答えた人に聞きます。具体的にどのような良いことがありますか？ ()	
5. スペインに興味はありますか？	すごくある どちらかというとある あまりない	
	➤ スペインのどのようなことに興味がありますか？ ()	
6. スペインに姉妹校があることを知っていましたか？	3年総合以前に知っていた 3年総合で知った 4年生になってから知った	
7. スペインと英語を使って交流するのに何をしてあげたらスペインの子どもは喜ぶと思いますか？	()	
8. スペインの姉妹校とどのような交流を今後してみたいですか？	()	
ご協力ありがとうございました。		

資料 2

アンケート②	2016.10.12
5年__組__番__	
ベラ・クルス校との交流についてのアンケート	
2015年冬から実験的にスペインのベラ・クルス校と交流をしました。 今後のよりよい活動のためにアンケートにご協力をお願いします。このアンケートは成績には全く関係がありません。集計結果は先生方が学校の外で発表する機会がある時に使用することがありますが、個人名は公表しません。	
1. 今、英語は好きですか？	
すごく好き どちらかという好き どちらともいえない あまり好きではない	
2. スペインの子どもと英語で交流をしてみた感想を教えてください。	
してよかった 特に何も感じなかった しない方がよかった	
3. 交流してみて、改めてスペインの子どもは初等科生より英語が上手だと思いますか？	
すごく上手だと思う どちらかという上手だと思う 同じくらいだと思う そこまで上手だとは思わない	
➤ なぜそう思いますか？	()
4. スペインの子どもと英語で交流するとあなたにとって良いことがありましたか？	
すごくある どちらかというある あまりない	
➤ 「ある」と答えた人に聞きます。具体的にどのような良いことがありますか？	()
5. この1年間の交流で興味がわいたことがありましたか？	
すごくわいた どちらかというわいた あまりわかかなかった	
➤ わいた人は、どのようなことに興味がわいたか具体的に教えてください。	()
6. スペインと英語を使って交流するのに何をしてあげたらスペインの子どもは喜ぶと思いますか？	()
7. 学年としてのスペインの姉妹校との交流は終わりましたが、学年として以外でも、どのような交流を今後してみたいですか？	()
ご協力ありがとうございました。	